

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成 26年 12月 3日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学研究科 人間健康科学系専攻

職名・学年 修士課程2年

氏名 小段 裕太

助成の種類	平成26年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	Society for Neuroscience's 44th annual meeting (第44回北米神経科学学会)		
発表題目	A rubber hand illusion: Lateralization of brain area that is associated with body image (ラバーハンドイллюジョンを用いた身体イメージの形成に関わる脳領域のラテラリティについて)		
開催場所	アメリカ・ワシントンD.C.		
渡航期間	平成 26年 11月14日 ~ 平成 26年 11月 21日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000円	
	使用した助成金額	250,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	学会登録費・参加費	30,450円
		渡航費	116,870円
		宿泊費	83,003円
滞在費の一部		19,677円	
	上記に充当		
当財団の助成について	このような助成事業は手続きが煩雑でわかりにくいイメージがありましたが、貴財団の助成に係る手続きは大変簡便でわかりやすいものでありました。そのため、申請から受け取りまでスムーズに行うことができました。		

成果の概要

京都大学大学院 医学研究科
人間健康科学系専攻
修士課程 2年 小段裕太

この度、貴財団より助成金を頂戴し、Neuroscience 2014に参加致しましたので、その成果を報告いたします。

【学術集会の概要】

学術集会名：Neuroscience 2014

開催期間：2014年11月15日～11月19日

開催地：アメリカ、ワシントンD.C.

本学会は80以上の国から3万人以上の神経科学者が参加し、演題数も1万5千以上と非常に大規模な学会であった。それゆえ研究テーマも様々だ理、同じ分野の研究においてもその被験体にヒトと動物のどちらを用いるのか、その被験体に何を行い、そして、どのような部分を評価するのかなど多くの細分化された領域の研究が一同に会していた。シンポジウムやポスター発表のどちらにおいても様々な議論が繰り広げられ、また、様々な企業・研究機関が展示および広報活動を行うなど、神経科学の今後の発展がますます期待される学会であった。

【研究発表の概要】

本学会では、「A rubber hand illusion: Lateralization of brain area that is associated with body image」という題目の発表を行った。

運動、感覚、認知機能に障害をもつ患者に明確な自身の身体イメージを持たせることは、患者の回復過程において重要な1ステップとなるが、その身体イメージの形成の仕組みについては未明な点も多い。本研究では、身体イメージの形成に関わる脳領域を明らかにするとともに、その領域の左右半球の側性化も同時に調査するため、2種類（視覚性および体性感覚性）のラバーハンドイリュージョン（RHI）を用いて、被験者の両上肢の身体イメージを変化させ、その間の脳活動をfMRIで撮像した。その結果、全ての条件に共通して、内側前頭回における有意な血流量の増加が観察され、その賦活は左半球に共通して見られた。このことから、内側前頭回が身体イメージの形成に関与している可能性が示唆され、さらに、その活動は左半球に側性化していることが示唆された。

【参加意義】

上記の研究成果についてポスターにより発表した。4時間掲示し、そのうちの1時間はポスターの前に立ち質疑応答を行った。多くの研究者が本研究に興味を持ってくれ、積極的な討議を行うことができた。本研究結果はこれまでの類似研究とは異なる結論を述べていたため、「こ

れは面白い結果だ」とのコメントを多く頂きながら、だからこそもっと磨いていくべきだと多くのアドバイスを受けた。私自身、研究を進める中で新たな疑問が浮かび始めていたところであったが、自分一人ではそれを具体的な形にすることは難しかったように思う。そのため、今回発表したことで今後の課題が明確になったことは一番の収穫であった。また、多くの研究者に興味を持っていただいたこと、同じ研究をしている仲間に出会え、賞賛されたことは今後研究活動において大きな自信となった。

【謝辞】

最後になりましたが、国際学会という大きな場で発表できたこと、多くの貴重な知見を得ることができたのは、貴財団のお陰であります。心より御礼申し上げます。今回得た多くの知識・経験を今後の研究活動に活かしていくとともに、貴財団の今後の益々の発展をご祈念いたします。